

「ポリティカルコレクトネスとナレッジ・マネジメント」

ソーシャルメディア研究部会長 荒木 聖史

最近の世界のポリティカルコレクトネスの状況をみていると、何となく違和感を覚えます。もちろん、大雑把に言えば悪いことは言ってないですけどね。

「差別はダメだよね！」

「肌の色やジェンダーによる差別はいけないよね！」

そこに全く異論はありません。

ただ、差別を無くすためには、どんな手段も正当化されるような雰囲気、言葉という文化をそしてその言葉を使う人を文脈や歴史的経緯を度外視して今の価値観で断罪して社会的に抹殺してしまおうとする動きには違和感を禁じ得ないのです。

つまりはソーシャルメディアでの言葉狩りとそれに追随するマスコミのことを言っています。

昔からマスコミで発言全体の文脈を無視して一部だけを取り上げて自分たちの主張に合わない人や発言を貶めようという動きはありました。しかし、その手法を一般人まで使うようになってきたようです。それも愉快犯として自分の楽しみのためだけに。

そこに違和感を覚えているのです。

2013年に発行された「経営を革新するナレッジ・マネジメント」植木英雄編の中で、私はデータに視点を加えたものが情報であり、視点が与えられて初めて意味を持つと挿入した図に書きました。

<よこみち>

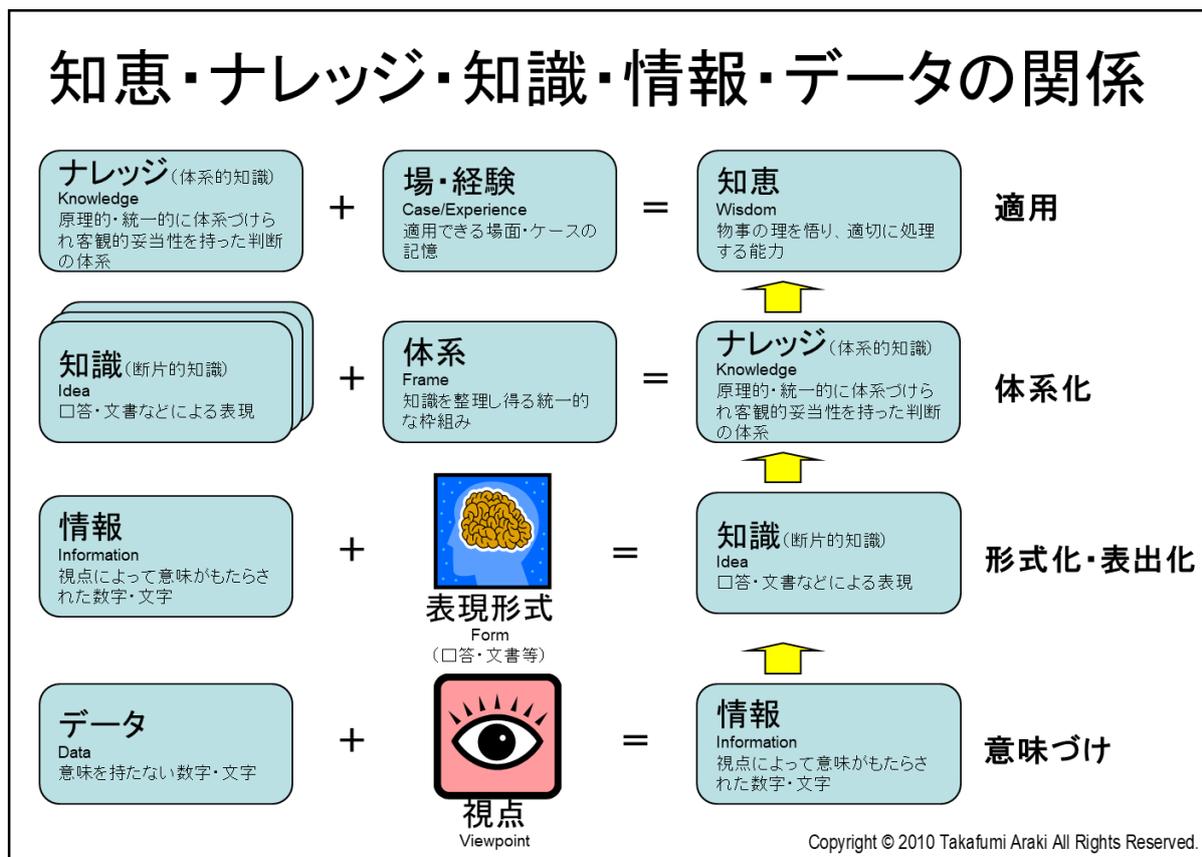
この本の一つの章を書くことを任された私は嬉しくて、出張先の本屋でも置かれているかどうか確認したりしていました。福岡に出張に行って博多の書店で棚の中に「経営を革新するナレッジ・マネジメント」を見つけて嬉しくなったのを覚えています。

で、ふと下に平積みされている本を見ると、私にこのエッセイのリレーをつないでくれた野村恭彦先生のお名前がありました。

私たちの本は棚に一冊。野村先生の本は平積み、そのうちにお酒を一杯奢ってもらおうと心に誓った瞬間でした。(笑)

<よこみち>

この図を考えた時点では個人の中のナレッジしか考えていなかったですが、今のソーシャルメディアの中に知が蓄積され続けているのを見ると図をアップデートする必要があるようです。



今から見ると2010年当時、私はまだ身体的な知のイメージから脱しきれず、バーチャルの世界の可能性を軽く見ていました。

しかしながら、ソーシャルメディアに参加する人たちを見ると、バーチャルな場でありながら、直接の身体的接触を伴わないにも関わらずナレッジが形成されていくことが体感的に理解できたのです。

私は、視点が事象に意味を与えるとしているわけですが、それはつまり、同じものを見ても視点が違えば、別のものに見える。「群盲象を評す」に表されていることそのものです。絶対善の視点は、群盲の中の一人と同じとは言えないでしょうか。

絶対善が存在すると考えるのがユダヤ教的一神教文化、絶対善など存在せず、相互の関によって変化する相対的なものだとするのが日本のような多神教文化だとすれば、私の感じていた違和感というのは、正しいことは一つ、それに反することは誤りである、というユダヤ教的一神教文化の押し付けがましさに対してなのかもしれません。

ナレッジ・マネジメントを推進しようとする時、社内でもこのような文化の衝突は往々にしてよくあることです。上位のマネジメント層が言ったことと違うことを言った人の発言は付度によっ

てなかったものとされてしまう。

新たな知を生み出す土壌である多様性を排除する方向に動いてしまうのです。上位のマネジメント層が、多様性の重要性を理解して推奨していたとしても、北朝鮮のマスゲームが美しくあるべき姿だと思う人たちによって。

しかし、日本はユダヤ教的一神教ではなく、キリストすら八百万の神の一柱として相対化してしまう日本人は独特の視点を提供できる稀有な存在だと私には思えます。これは一神教の文化をベースとし、絶対善を疑うことのない人たちには理解できないことかもしれません。

こういう話をしているいつも思い出すのは、スタジオジブリの「紅の豚」の中でのジーナのセリフです。母国、アメリカへ誘うカーチスにジーナが告げた

「ここではあなたのお国より、人生がもうちょっと複雑なの。」

二元論で語れるほど単純じゃないですよ。誰かにとっての悪が、誰かにとっての善になりうることを私たちは日本人は、知っていますから。そしてまたその逆も然り。

だからこそ、原爆を落としたアメリカとも親友になりえたのだ。と私にはそう思えます。

さて次号のエッセイは、私にナレッジ・マネジメント学会に参加する楽しさを教えてくださった植木英雄先生にお願いしたいと思います。